肥前名護屋城の石垣における「城割」の実態と意味

“SIRO-WARI” SYSTEM ON THE STONE WALLS OF HIZEN NAGOYA CASTLE

木島孝之*
Takashi KIJIMA

I hope my thesis will provide a key to the progress in the study of “Shiro-wari” system. To begin with, I’ve taken the case of Hizen Nagoya Castle and given an example of removal of stone walls in terms of the superficial observation. I’ve considered how castles were influenced under “Shiro-wari” system through the analysis of the case of Hizen Nagoya Castle. From my study so far I’ve come to the conclusion as follows:

- 1) Judging from the present appearance of the stone walls of Hizen Nagoya Castle, they seemed to be fallen down artificially, which I’ve proved by giving a convincing example in this thesis.
- 2) “Shiro-wari” was a ritually-colored system to have castles suspend their functions temporally, but never to make them lose their functions completely.

Keywords: “Shiro-wari”, Hizen Nagoya Castle, castle, stone walls,
“城割”, 肥前名護屋城, 城郭, 石垣

1. はじめに

近年の城郭研究は考古学、文献史学、歴史地理学等の分野を越えた学際的な研究のもとで飛躍的に発展しつつある。その中で注目されるのが「縄張り研究」と称される新たな研究分野である。この研究は城郭遺構の表面観察により解釈した城郭の「縄張り」（註1）を「縄張り図」（註2）に作成し、この図面をもとに城郭の“かたち”（堀・土塁・虎口の形状（ﾌﾟﾗﾝ）、曲輪の配置や形状等）を分析し、それを創出した権力や社会の様相を考察しようとするものである。この研究の利点は、遺構の破壊を伴うことなく城郭の最終期の姿を知ることができ、また、調査は多大な労力や経費を必要とせず手軽に行えるということにある。この利点から近年、「縄張り研究」が各地で盛んになり多くの「縄張り図」が研究成果として提示されつつある。

ただ、「縄張り」を解釈する場合に、「縄張り研究」を行う者なら恐らく誰もが経験したであろう問題、つま

り現在破損している遺構が人為的な破却を経たものか否か、すなわち「城割」（註3）かどうかという問題が今までそれほど注目されずにきた嫌いがある。実際、城郭の「縄張り」調査を続けていると崩壊した石垣をたびたび目にするが、その城郭に元和「城割」令等による「城割」の記録・伝承等が残る場合、崩壊している石垣遺構を即座に「城割」と結びつけたくなり、自然崩壊というごく当たり前のことをつい忘れがちになってしまう。安易に石垣の崩壊と「城割」の記録を対応させることは、「城割」という行為の意義を見えなくしてしまう恐れがある。なぜなら、「城割」の記録の残る城郭遺構をみた場合、石垣を崩すもの（鷹取城（註4））がある一方で、崩さないもの（獅子ヶ城（註5））もあり、この一律でない実態には何らかの政治的・社会的要因が反映されていることが予測されるからである。ここで、石垣がどういう崩れ方をしている場合が人為的な破却なのかを見分ける方法が必要となってくる。

* 九州大学工学部建築学科 大学院生・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyushu Univ., M. Eng.

考古学の分野では、発掘により黒田領の鷹取城（文献4）と伊達領の木村館（文献5）の石垣の破却が確認された例がある。これらの事例では、崩落した石材の間に堆積した土砂の状態から人為的な破却であったことが検証されている。一方、地表面観察を主とする「縄張り研究」の分野では、今のところ破却を受けた石垣の明確な事例は提示されていない（註6）。破却を検証するには発掘が最も有効な手段といえるが、ただ発掘を行うにしてもまず破却か否かの予測を事前につけておくことは大変重要なことである。なぜなら、予測なしに発掘を行ってしまった場合、崩壊した土砂や石材を作業に邪魔なものとして安易に撤去し、破却か否かを永久に判らなくしてしまう恐れがあるからである。また、発掘による検証にはかなりの時間と莫大な経費がかかり、この方法のみでは城郭の資料化がなかなか進まないという現状がある。そのため、まずは地表面観察による「縄張り研究」で予測をつけ、次いで考古学的にそれを検証していくという手順が城郭研究の望ましい方法であると考えられる。そこで地表面観察による「縄張り研究」の立場から「城割」による人為的な破却を検証する方法が必要になっている。

次いで「城割」か否かの問題に絡んで、近年、考古学の発掘成果を基に「城割」の意味について再検討を促す見解が出され注目されている。一般に、「城割」という言葉が与えるイメージは城の戦闘機能を消滅させる程の徹底的な破却であろう。しかし、部分発掘された南部領の根城（文献7）、伊達領の木村館（文献5）の調査結果では、城跡を土塊にしてしまうような徹底した破却は行われておらず、主要な部分を限定的に崩すものであったことが報告されている。具体的には、木村館の場合、外郭部の櫓形虎口の石垣が徹底的に破却されているのに対して、城域全体に設けられた土塁・空堀等の遺構はほぼ完全な状態で残っている。伊藤正義氏はこの実態を受けて、「外からよく見える出入口施設＝虎口は徹底的に破壊されている。しかし、外からよく見えない部分の土塁などは、かなり元の姿を留めている。やはり伊達領でも、城破りは、徹底した破壊・廃城というよりも、あたかも坊主頭になって恭順の意を表すのに似た、秀吉への服従を表す象徴的な行為だったにちがいない。」（文献8）という、「城割」は儀礼的な要素が強いという主旨の見解を述べておられる。ここで虎口を城の顔に当たる部分と捉えれば、それを壊すという点で確かに儀礼的要素が強いという解釈が可能である。しかし、虎口が城内で最も重要な場所であり（防御の上で最大の弱点となる箇所であると同時に、出撃口として攻撃の機能を担う箇所である）、しかも木村館の破却された虎口は出撃性の強い外枳形虎口（註7）であることを考えた場合、この虎口の破却は戦闘機能を奪う上で最も有効であると考えられる。したがって、木村館は「城割」の儀礼的側面と

いうより、むしろ実質的側面を物語る事例とすべきではないかと思われる。しかし発掘調査による事例の提出に伴って「城割」における儀礼的要素に関する研究が、今後ますます注目されることは確実であろうと思われる。それに際して地表面観察による「縄張り研究」の見地からもこの問題に関する事例を提示し、議論に参加して行くことが必要であろうと思われる。

上述の問題意識から本稿ではまず、肥前名護屋城の遺構の現地調査によって作製した「縄張り図」を用いて、石垣の破却を検証する方法の一例を提示する。そしてこの石垣の破却の形態の中で「城割」における儀礼的要素とは何かを検討し、「城割」に対する理解を深めることを目指す。

2. 文献史料にみられる肥前名護屋城の「城割」

肥前名護屋城は天正19年(1591)、朝鮮出兵の際の本営として豊臣政権によって築かれた大城郭である。その石垣は高さ4～11m、延長2000mにも及ぶ大規模なもので、所々に崩壊がみられるもののほぼ完全な形で現存している。

肥前名護屋城の「城割」に関する同時代史料は今のところ見い出せない。後世の記録では以下のものが挙げられる（註8）。

『松浦記集成』（第一編 松浦黨並古城）－「六 唐津城 寺澤家興廢の次第 寺澤志摩守唐津城を築かれし事、其起元文祿元壬辰年秀吉公朝鮮征伐、同三甲午春諸侯歸陣の時、岸嶽城主波多三河守朝鮮國釜山より歸帆、直に常陸國筑波山の麓に配流の下知有る之、右同二月九日也。其波多領八萬三千二十九石七升寺澤家へ被下、岸嶽城一圓拜領となる。田中の城に當時假城とし、其後名護屋城も領内の中にて、不用の城櫓櫓門、屏、等拜領にて是を毀ち取り、唐津に城地を見立船送して築かるる」（註9）

『松浦記集成』（第六編 古事）－「一 唐津城 天正十九年辛卯、秀吉公朝鮮之役、名護屋御在陣、文祿三甲午諸將歸朝となる、同二月九日波多三河守鎮公流罪となる、依之舊領松浦郡、草野領怡土・松浦、都合八萬三千石志州公唐津拜領、後ち天草四萬石を合せ十二萬三千石となる。志州公、初は田中島村城に居られ、郷中所々新田御普請に及び、元和二丙辰年波多、草野舊領再檢地等有之、唐津城御普請、名護屋城並御陣所の材木拜領にて成就有之候、」（註9）

『松浦昔鏡』（唐津城の根源）－「都合十二萬三千石寺澤志摩守殿御拜領被成、初て田中に御入城被成、夫より文祿年中唐津城取立、名古屋御城の御材木にて御普請、今之唐津御城是なり。」（註10）

『松浦要略記』（唐津城主御代々）－「一 唐津御城御普請 慶長七壬丑年より始まり同十二年迄七ヶ年にて御成就有是候。名護屋御城の道具・材木不殘御引取被成候」（註11）

『松浦拾風土記』（巻二）－「四十三 寺澤志摩守殿之事並鏡宮神靈寺澤兵庫頭殿變死之事 唐津八萬三千石、天草四萬石都合十二萬三千石拜領有り、名護屋の御城を引き、唐津に築城、」（註12）

『唐津拾風土記抄』－「垣副城 名古屋肥前守藤原經元より－（中略）－越前守經延迄十代の居城なり、然る處天正十九年豊公朝鮮征伐陣城御築の節、當城差上、經延は殿前に引移り、其跡今殘る御城也、凱陣の頃諸營石垣等まで引け、今の唐津御城是也、名古屋城破却せられけれども廣大なる事ゆへ今なほ存せり、垣副の城は消失たり、今天守臺の所なるべし。」（註13）

『広澤寺文書』－「寺澤志摩守様名護屋御城御拜領慶長四巳亥年より享保二年迄百二十年程然共名護屋御城には不被成御座唐津御城御普請被成御屋形御引取御立被成候由申傳候御父子様御代四十七年程云々」（註14）

さて、ここに挙げた史料から肥前名護屋城の「城割」に関してどのようなことが判るであろうか。

まず、肥前名護屋城の「城割」の時期についてであるが、寺澤氏の唐津築城に際して行われたという点ではどの史料も共通している。ただ唐津城の築城の年代については、『松浦昔鏡』は文禄年中(1592～1594)とし、『松浦要略記』は慶長7年(1602)よりとし、『唐津拾風土記抄』は朝鮮役からの凱陣の頃(慶長3年(1598))、としている。そしてその他の史料では、具体的な年代は記されていない。

次いで破却の内容についてであるが、史料によって微妙に表現が異なる。つまり、『松浦記集成』（第六編古事）・『松浦昔鏡』には「材木」が唐津城に転用されたこと、『松浦要略記』には道具・材木が残らず唐津城に引き取られたこと、『松浦記集成』（第一編 松浦黨並古城）には櫓門、塀等が壊され唐津城に船送し転用されたこと、『松浦拾風土記』には肥前名護屋城の何らかのものが唐津城に引かれたこと、『広澤寺文書』には「御屋形」が唐津城に引き取られ建てられたこと、が記されている。また、『唐津拾風土記抄』には諸侯の陣所（肥前名護屋城の周囲に百箇所以上の諸大名の陣城がある）が「石垣等まで」唐津城に引かれたことが記されているが、肥前名護屋城自身については破却されたとあるものの具体的な内容は記されていない。

これらの史料の記載から、肥前名護屋城は寺澤氏の唐津築城に際して、何らかの形で「城割」を受けたということが判る。しかし、破却の内容に関する記述が史料により微妙に異なるため、破却がどの程度のものだったの

かについては、はっきりしない。そして、所々にみられる石垣の崩壊がこの時の「城割」によるものかどうかについては全くわからない。

その後については、幕府から出された元和の「城割」令による破却の可能性が考えられるが、それについての記録はない。また、寛永14年(1637)、天草乱の残党軍がこの城に立籠もるといふ風説があり、驚いた唐津藩が石垣の要所を破却したという伝承が残っているようであるが、典拠等が示されず詳細は分からない(註15)。なお、元和の「城割」令に続いて、天草乱の直後に寛永の「城割」令とでも呼ぶべきものが幕府より出されたのではないかと推測を可能にする幾つもの史料がある(註16)。また、寛永の「城割」令による破却の具体的な事例として、1994年に発掘調査された毛利領の岩国城が挙げられる(文献18)。この発掘調査によって、天守台に関しては、元和の「城割」で建築物が破却され、次いで寛永の「城割」によって石垣が破却されたことが確認された(註17)。ただ、岩国城の例にしても、元和の「城割」令による石垣の破却が文献に見え(註18)、天守台以外では寛永の破却がどの程度のものであったかは現段階では速断できない。元和・寛永の史料、発掘資料を共に欠く肥前名護屋城ではなおさらである。

以上、文献史料から肥前名護屋城の石垣の崩壊時期を推定することは困難といえる。

3. 肥前名護屋城の石垣の崩壊状況

現在、肥前名護屋城の石垣には所々に崩壊した箇所が見られる。この崩壊の状態を調査し図面化した結果が図1「肥前名護屋城縄張り図」である。これは『特別史跡名護屋城跡並び陣跡3 文禄・慶長の役城跡図集』（文献19）所収の実測図（1/1000）を参考に、筆者が1988年5月と1994年5月に方位磁石と巻尺および歩測によって表面観察から作成したものである。そしてこの図からは石垣の崩壊状況の特徴として、以下の5点が挙げられる。

- a) 本丸の南面および西面、馬場の南面、遊撃丸の北面は、墨線をほぼ等分するような間隔で崩れている{あーいーう、えーおーかーき、くーけーこーさ、たーちーつーて、とーなーに}（写真1、2、3、4、5）。その中で本丸の南面と馬場の南面の崩壊箇所は、ほぼ対応する{A～E}。また、二ノ丸、東出丸（仮称）、弾正丸についても墨線をほぼ二分、三分するような形で崩れている{せーそ、まーみ、へーほ、しーず、のーは、ひーふ、ぬーね}。なお、崩落した石垣は下に堆積し残存している。また、崩壊箇所周辺の石垣は、はらみも特にはなく自然崩壊する状態にはない。

写真1 (あーいーう) 部分の石垣の崩壊状況

写真5 (けーこーさ) 部分の石垣の崩壊状況

写真2 (あーいーう) 部分の石垣の崩壊状況

写真6 天主台石垣の崩壊状況

写真3 (とーなーに) 部分の石垣の崩壊状況

写真7 出隅部分①の崩壊状況

写真4 (くーけーこーさ) 部分の石垣の崩壊状況

写真8 天端部分②の崩壊状況

図1 「肥前名護屋城縄張り図」

- b) 天守台の石垣が完全に崩壊し、崩落した石材はほとんど撤去されている（写真6）。
- c) 水ノ手、本丸の北面、三ノ丸北面の石垣が完全に崩壊し、崩落した石材はほとんど撤去されている【ア〜カ】。
- d) 数箇所を除き出隅部分の石垣はほぼ根元近くまで崩壊している（写真7）。
- e) 大半の箇所で天端部分の石垣はほとんど崩壊している（写真8）。

4. 肥前名護屋城の石垣における破却の可能性についての考察

前記の崩壊状態の諸特徴から破却の可能性について検討を加えてみよう。

まず、特徴a)についてであるが、崩壊箇所がピンポイント的で、しかもそれがおよそ規則性を持っていること、そして特にA〜Eの崩壊箇所がほぼ対応していることは、自然崩壊とするには疑問が残る。更に崩壊箇所の周辺の石垣が健在であることを勘案するといっそう不自然な観が増す。この特徴a)は破却と考えてまず間違いないと思われる。

次いで特徴b)、c)についてである。肥前名護屋城の大部分においては、石垣は完全には崩壊しておらず、また崩落した石材は下に堆積し残存している。しかし、この部分の石垣だけが完全に崩壊し、崩落した石材が撤去されている状態はやはり不自然である。石材の撤去に関しては、後世に地元住民によって持ち去られた可能性も考えねばならないが、集落に近くしかも運搬が容易な城山の麓にある山里曲輪の石垣がほぼ残存することを考えた場合、丘の上にあり運搬が不便な天守台および本丸北面・水ノ手の石材が後世に持ち去られたとは考えにくい。これは破却と考えるのが妥当と思われる。

次いで特徴d)、e)の考察に移る。一般に天端および出隅部分の石垣は自然崩壊しやすいものと思われる。このことから、天端および出隅部分の石垣の崩壊が破却の結果か否かを判断する際には慎重になるべきである。ただ、肥前名護屋城の場合、周辺の石垣ははらみがなく健在であるにも関わらず、出隅部分の石垣のみがほぼ全箇所において根元近くまで崩壊している状態は、やはり人為的なものであったことを予測させる。この場合、出隅部分の石垣の破却は、隅櫓の構築を不可能なものとし、更に石垣を登る際に最も取り付きやすい足場を造る狙いがあったと考えられよう。なお、特徴e)の天端の崩壊については破却か否かの判断を下しにくい。ただ他の部分の石垣の崩壊が破却であることが明らかになったならば、天端部分の崩壊も破却であった可能性を想定して良いと思われる。その場合、天端の破却は櫓や土塀等の重量構造物を塁線いっばいに構築することを不可能にするための

措置と考えられよう。

以上、遺構の表面観察の見地から、肥前名護屋城において現在観察できる石垣の崩壊について「城割」の可能性を検討してみた。その結果、要所要所におけるピンポイント的な崩壊、天守台および本丸北面・水ノ手周辺での完全な崩壊と石材の撤去、出隅部分におけるほぼ全箇所での崩壊など、極めて特殊な崩壊があることが指摘できた。そしてこの実態から、肥前名護屋城にみられる石垣の崩壊は全て人為的な破却の結果であった可能性が高いことを提示した。

5. 肥前名護屋城の「城割」における儀礼的側面の検討

前章において肥前名護屋城の現在の石垣には「城割」による人為的な破却を受けた形跡があると判断したわけであるが、それではその破却の形態の中に「城割」の儀礼的要素を認めるべきであろうか、あるいは戦闘機能の剥奪という実質的要素の方を強く認めるべきであろうか。

ここでは、ピンポイント的な破却の形状に注目してみたい。これに関しては、肥前名護屋城の膨大な石垣を大々的に崩すのに要する労力的・経済的負担を考えるとやむをえない措置だったとの解釈もできよう。ただ、「城割」の第一の目的が戦闘機能を剥奪することにあるならば、破却の労力をピンポイント的に散らせるのではなく、城内で最も重要な箇所である虎口部分に集中させてその形状さえ崩してしまう程の破却を加えたほうが戦闘機能に与えるダメージは絶大である。織豊系城郭の場合、特に虎口のプランには最大の努力が注がれ、他の戦国大名の城郭における虎口のプラン（形状）と比べて格段の発展を遂げてきた経緯がある（文献9）。肥前名護屋城における本丸東側の虎口は外柵形（註19）と呼ばれるとりわけ攻撃性の強い虎口プランであるが、これは織豊系城郭の「縄張り」の発展過程において根幹的な役割を果たしたプランである（文献9）。また東出丸（仮称）のプランは、外柵形虎口の出撃性をさらに高めるために勢溜となる虎口空間を拡大させ橋頭堡的機能を持たせた非常に攻撃的なプランである。同様のプランが近江八幡城・石垣山城等の豊臣政権の代表的な城郭の大手口にも使われている。このように肥前名護屋城における虎口は内柵形・外柵形という織豊系城郭の軍事技術の粋を集め計画されたプランである。しかし肥前名護屋城の虎口部には、他の箇所と比べた場合、特に入念に破却された痕跡はない。それどころか、木村館における虎口の徹底的な破却とは対照的に、肥前名護屋城の虎口は現在でも形状は明確であり、積極的な破却の意図は認められないといえるべきである。このことから、肥前名護屋城の石垣におけるピンポイント的な破却が、（経済的・労力の制約を考慮したとしても）戦闘機能の消滅、つまり“城を使えな

図2 名護屋城周辺図

△88.7は天守台

くする”ことを第一の目的にしたものだったとは考えにくい。

むしろ、ピンポイント的な破却の場合、城の塁線をほぼ等分するような間隔で満遍なく破断が入ることが重要であろう。この手法ならば城外のどの場所から見渡しても破却行為が行なわれたことが確認できるからである。そしてこれは、城郭の戦闘機能を温存しつつ、少ない破却の労力で“城を使わない”という意志を出るだけ表明しようとする意図と解釈すべきではないだろうか。また、延々と延びる塁線をほぼ等分するような間隔で破断が入れられていることに加え、馬場の南面と本丸の南面の破断箇所（A～E）がほぼ対応している形態は、形式性を帯びており“みせる”ことを強く意識した儀式的なものと解釈すべきではないだろうか。以上のことから、ピンポイント的な破却の形態の中に城郭の機能（戦闘要塞、威嚇、権力の象徴）の一時的な停止・凍結の意志表明を目的とした儀礼的要素を汲み取ってよいのではないだろうか。

次いで天守台および本丸北面・水ノ手の石垣が徹底的に破壊されたうえに石材まで撤去されている状態に注目してみたい。

肥前名護屋城の立地をみると（図2）、城の南・西・東方面には丘陵地が続く。北側方面にのみ、谷間部分を利用した集落が形成されている。大久保、麦原、畑中、池ノ端、茜屋町、浜の辺りである。「名護屋城並諸侯陣跡之図」（文献20所載）には朝鮮役当時の城下町と思われる

「ムキハラ丁」、「大久保丁」、「ナコヤ丁」、「材木町」、「アカネヤ丁」、「兵庫町」、「古里町」等の集

落が描かれており、現在の地名と対照すれば、大久保が「大久保丁」、麦原が「ムキハラ丁」、池之畑が「材木町」・「ナコヤ丁」、茜屋町が「アカネヤ丁」・「兵庫町」、浜が「古里町」に比定できる。朝鮮役の終了後、これらの城下町はその機能を終え江戸期には名護屋村として一般集落化したものと考えられるが、村高は「慶長肥前国絵図」（註20）に2843石余、「正保肥前国絵図」（註21）に1995石余とあることから、かなり大きな村として残ったものと推定される。

この集落（旧城下町）から肥前名護屋城を眺めた場合、城の北面が視覚の対象となる。城の北面は前述のとおり、他の方面と比べて大々的に破却されている。戦闘力を削ぐ目的からは、北面が他の方面よりも特に重要であるというわけではない。したがって、この現象からは、破却行為を積極的に人目に触れさせようとする意図が伺え、ここに「城割」の儀礼的な要素を汲み取ってよいのではないだろうか。また、山上の天守は集落（旧城下町）からはひときわ目立つ位置に配置されているが、これは高々とした天守台の石垣と高層の楼閣建築を人々に見せつけることで、権力の絶大さ（財力、動員力、威圧感等）を誇示する狙いがあったものと考えられる。したがって、城中で最も権力の象徴としての機能を帯びた天守が石垣までも徹底的に破却されている状態は、城郭が持つ機能の中でも特に権力の象徴・威嚇という部分を停止・凍結したことを視覚的に表明するための儀礼的措置と解釈できるのではないだろうか。

6. 肥前名護屋城の石垣の破却の目的と時期の検討

文献史料の面からは肥前名護屋城の石垣の破却時期について三つの可能性、つまり、慶長の唐津築城時、元和の「城割」時、天草乱直後の寛永の「城割」時を挙げることができるが、石垣の破却の目的と時期を特定することは不可能であった。それでは、遺構の面より石垣の破却の目的と時期を特定することはできるであろうか。ここでは肥前名護屋城の石垣の破却方法が戦闘機能を剥奪することに主眼を置くものではなく、“城を使わない”という意志を儀礼的に表明するものである、つまり天守という象徴的な部分や集落から見える方面を大きく破却したり、墨線を等分化するような形式性を帯びた破却形態を採っていることに注目してみたい。

“城を使わない”という意志を儀礼的に表明するために石垣を破却する場合、誰が誰に対して儀礼を尽くす必要があるのかということが問題となろう。この際、二つの場合が考えられよう。まず一つは、幕府が大名から余分な城（戦闘施設）を取り上げ大名間抗争（私闘）の凍結を宣言し視覚化するという目的に対応して、大名が幕府に対して破却の意を儀礼的に示すということが考えられよう。そしてもう一つは、大名当主が城持ちの大身家臣から城主という自律した地位を剥奪する目的に対応して、城持ちの大身家臣が大名当主に対して持ち城の破却の意を儀礼的に示すということが考えられよう。これに関しては、『別本吉川家譜』「廣正公ヨリ御本家へ差出サル、御書物」（文献3収録）にみえる毛利領の岩国城の破却の例が挙げられる。この家譜の記述からは、毛利輝元が元和の「城割」令を逆手にとって吉川氏（毛利家中における筆頭重臣）の岩国城を積極的に破却しようと画策し（註22）、これに対応して吉川氏がとりわけ城の表の方の石垣を山下からも城からもよく見えるように崩した（註18）ことが伺える。

肥前名護屋城の場合は、大身家臣の持ち城ではなく、寺澤氏の直轄であったと考えられる（註23）。したがって、肥前名護屋城の石垣にみられる儀礼的な破却の主体は寺澤氏であったと考えてよかろう。その場合、儀礼を尽くす相手は幕府ということになる。目に付きやすい方面の石垣を集中的に破却することは、寺澤氏が幕府に対して私戦の凍結の意を表明するために行ったものとみるのが妥当と考える。これによって虎口部分の破却を免れるメリットも考えられよう。この見解に立てば、石垣の破却の時期が慶長の唐津築城時である可能性は低い。なぜなら、慶長の段階では寺澤氏が儀礼的な石垣の破却を幕府に示さなければならぬ必要性は特に見当たらないのである。また、唐津築城時の「城割」に関する文献史料には建築物類の破却が記されながら、より多くの労力を必要とするはずの石垣の破却についての記述がみられないのは不自然である。これは唐津築城時の「城割」が石垣の破却を伴うものではなかったことを傍証している

のではないと思われる。

次に石垣の破却の時期について残るのは元和の「城割」令あるいは寛永の「城割」令による可能性であるが、この何れであったのかは率直に言って現段階で特定することは困難である。そのため今後の課題として、寛永の「城割」と考える場合の問題点について若干ふれてみることにする。

まず、寛永の「城割」令に関して、この「城割」令の性格が『蜂須賀家記』、『越登賀三州志』、『肥後宇土軍記』および『名護屋城秘史』の風説等が伝えるように、本当に天草乱のような反乱の再発を恐れての軍事施設の破却を目的としたものであったならば、虎口部分にこそ破却のエネルギーを集中させるべきであったろう。そこでまずは、肥前名護屋城の石垣の破却は寛永の「城割」令によるものではなかったという解釈が成り立とう。しかし逆に、肥前名護屋城の石垣が本当に寛永の「城割」令を受けていたとするならば、この「城割」令の性格は反乱を恐れてのものではなく、もっと別の真意、つまり大名の私戦の凍結意志表示を幕府が儀礼的に求めたものであった可能性を検討する必要が生じてこよう。

7. まとめ

上記の考察により肥前名護屋城における石垣の崩壊は「城割」によるものであるとの見解を提示した。その際、石垣の破却の検証方法の一例が表面観察を主とする「縄張り研究」の立場から提示できたのではないかと考える。次いで、肥前名護屋城の石垣の破却におけるピンポイント的な破却と天守台および集落側の徹底した破却の形態は、戦闘機能を剥奪し“城を使えなくする”という目的よりもむしろ城郭の機能（戦闘要塞、威嚇、権力の象徴）を停止・凍結させた、つまり“城を使わない”という意志を視覚的に表明するための儀礼的要素が強く作用した結果ではないかとの見解を提示した。ここに「城割」における儀礼的要素について「縄張り研究」の立場から新たな事例が提示できたのではないかと考える。また、肥前名護屋城の石垣の破却の目的については、破却形態が儀礼的であることを根拠として、寺澤氏が幕府に対し私戦の凍結の意を表明するために行ったと推察した。石垣の破却の時期については、唐津築城時ではなく元和か寛永である可能性を指摘したが、その何れであるかは現段階では特定するまでには至らなかった。ただし、石垣の破却の時期を寛永の「城割」とする場合に生じる問題点の所在を提示した。

なお、以上の考察が正しいとするならば、肥前名護屋城石垣に見られる崩壊した遺構の状態そのものが「城割」の実態を示す事例として歴史的価値を持つものであるといえる。しかし現在、肥前名護屋城では崩壊した石垣の

積み直し作業が進行中である。既に山里曲輪の外枳形虎口および城内の櫓台の幾つかは積み直しが完了している状態である。その際、崩壊していた石垣が、自然崩壊なのか、破却なのかを考古学的に特に検証した様子はない。今後、他の崩壊部分の積み直しが進行するであろうと思われるが、その際、考古学的検証が行われることを望みたい。また結果、破却であることが検証された場合、安易な積み直しが控えられることを望みたい。本稿が今後の積み直し計画に再考を与える契機となれば幸いである。

なお、本稿は平成六年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費、人文）による研究成果の一部をまとめたものである。

註

- 「縄張り研究」での「縄張り」とは、堀・土塁・石垣等の土木構築物によって作り出される城郭の“かたち”（堀・土塁・虎口の形状（ブツ）、曲輪の配置や形状等）をいう。
- 筆者のいう「縄張り図」とは、堀・土塁・石垣等の土木遺構を表面観察し、それがどのように有機的に合わさって城郭の“かたち”を構成しているのかを評価し、それを図面化したものである。表面観察する地形に対して評価が入る点で、等高線による実測図とは性格や目的が異なる。「縄張り図」の性格と有効性および等高線による実測図との違いについては（文献1）・（文献2）に詳しく述べられているので参照されたい。
- 『別本吉川家譜』・『細川家記』・『松井家譜』（文献3に収録）等の古記録においては、「城割」、「破却」、「城破」、「城刷」という語が同義語として使われている。
- 慶長期の黒田領の支城。所在は福岡市直方市永満寺の鷹取山山上。発掘調査により「城割」による石垣の破却が確認されている（文献4）。
- 切石と完成された算木積みによる高度な石垣の技法より慶長期の寺澤領の支城と考えられる。所在は佐賀県厳木町浪瀬の城山山上。
- 宮田逸民氏により播磨利神城石垣の城割が報告されている（文献6）。氏の論考の主旨は、まず石垣の崩壊のメカニズムを考察し、次に利神城・石垣山城の崩壊箇所において、出隅部分の石垣の脇が大きく崩れているにも関わらず出隅部分の石垣ははらみながらも健在している状態を以て出隅部分の石垣は崩れにくいという前提を導き、その上で周辺の石垣に異常が無く出隅部分の石垣のみ崩れている場合を「城割」による破却と判定するものである。しかし、果たして出隅部分の石垣は周辺の石垣よりも必ずしも崩れにくいといえるのかという疑問が残る。それは、マスタバ（古代エジプトの墳墓）をみた場合、むしろ隅部分および天端部分が崩壊しており、一般的に出隅部分は自然崩壊しやすいのではないかとと思われるからである。また、利神城において隅石垣になっている箇所は全て崩壊しているわけではなく、主郭部をはじめかなりの箇所は健在しているが、主郭部に「城割」がないという状態には少々疑問が残る。そのため宮田氏が認定された利神城等の石垣の破却については、「城割」によるものなのか、自然崩壊なのか、あるいは後世の石取りによるものなのかについて、まだ議論が分かれるところではないと思われる。ただ、宮田氏の論考は、利神城を中心に岩国城、下津井城等の石垣の崩壊を「縄張り研究」の立場から「城割」として初めて本格的に論じ、議論の必要性を提示した点で先駆的な研究である。宮田氏によって提起された石垣の破却にたいする問題に今後、特に重点的に取り組んで行く必要を感じる。
- 外枳形虎口は墨線から「腕」を外側に張り出す形状のものをいう。これについては千田嘉博氏の解釈による（文献9）。
- 以下に挙げる史料は吉村茂三郎編『松浦叢書』巻1、巻2（文献10、11）に収録されている。吉村氏の解説によると『唐津拾風土記』の多くの部分が『松浦拾風土記』とほぼ同一の内容であると記している。そして『唐津拾風土記抄』は後者と内容の異なる部分を選択抄録したとある。各史料は著者・成立年代に不明な点が多く、相互関係は明らかでない。
- （著）河東義剛、（成立）文化4年（1807）、（写本）長崎県立図書館・東大史料編纂所・内閣文庫、（活字）（文献10）収録
- （著）不明、（成立）不明、（写本）国会図書館・内閣文庫・東大史料編纂所、（活字）（文献10）収録
- （著）松浦大教、（成立）文化年間（1804～1818）（活字）（文献10）収録
- （著）不明、（成立）文化年間（1804～1818）、（活字）（文献11）収録
- （著）不明、（成立）文化年間、（写本）佐賀鍋島家、（活字）（文献10）収録
- （著）不明、（成立）不明、（所蔵）佐賀県鎮西町広澤寺、（活字）（文献12）収録、寺伝を纏め編集したものである。なお、寺澤氏は正保4年（1647）に改易になっているので、文中の「享保二年迄百二十年程然共」という記述は明かに誤りである。
- この伝承は（文献12）に述べられているが、典拠があるのかあるいは口承なのかについては記載がなくわからない。
- 『蜂須賀家記』（文献13）、『越登賀三州志』（文献13）、『肥後宇土軍記』（文献14）、〔寛永15年〕卯月十三日「毛利秀就書状」（文献15）、〔寛永15年〕「六月七日、松平伊豆守殿江之御書」（文献16）等には、寛永の「城割」令の存在を伺わせる記述がある。ただ、どの程度の破却を行ったのかについては詳しく記されていない。〔寛永15年〕「六月七日、松平伊豆守殿江之御書」（文献16）によると、佐敷城（旧加藤領）の石垣は元和の「城割」で崩れていたが、石の見えるところが少しあったので、この度〔寛永15年〕石をのけさせたとする。しかし、佐敷城には現在も石垣がかなりしっかりと残っている箇所があり（文献17）、実際にどの程度の破却が行われたのかは、文献のみでは判断できない。
- 岩国城の「城割」に関しては、『別本吉川家譜』「廣正公ヨリ御本家へ差出サル、御書物」（文献3収録）と〔寛永15年〕卯月十三日「毛利秀就書状」（文献15）があり、これらから岩国城の石垣は元和と寛永の二度の「城割」令によって破却されたことが推測される。現在、天守台の石垣は高さ1/2～1/3のところから上が崩壊しており、1994年の発掘調査によって「城割」の状況が確認された。発掘を担当した山口県埋蔵文化財センターの豊島正行氏に伺った話によると、天守台部分の建物の破壊は元和の「城割」、石垣の破却は寛永の「城割」によるものと判断できるとのことである。その根拠を要約すると、天守台の裾には一層の瓦の堆積層や漆喰と思われる石灰層があり、その上に数十年分に相当すると思われる二次堆積層を挟んで石材が堆積している状況があり、これから、まず、天守が崩され、数十年空けてその上から石垣が崩されたことが推定できるとのことである。つまり、瓦と石灰の堆積層は最初の「城割」である元和の「城割」令によるものと考えられ、その後の年月を経た石垣の崩壊は寛永の「城割」と判断できるとのことである。ただ、今回発掘された天守台以外の箇所での石垣の崩壊については、まだその時期は判断はできないとのことである。
- 『別本吉川家譜』「廣正公ヨリ御本家へ差出サル、御書物」（文献3収録）には「城ノヲモテノ方ヲ取分ヲシテ可然候一中路一山下ヨリモ城ヨリモ、ヨク御見合候ヘク候トアリ」とあり、吉川氏が家臣に、とりわけ表の方の石垣を山下からも城からもよく見えるように崩すよう指示している。
- 本丸東側の虎口については、「腕②」が墨線より内側に入る形状から内枳形との中間型とも解釈できるが、「腕①」のように墨線から外に大きく振り出す形状とこれに連なる東出丸（仮称）の相関から考えると、強い出撃性を示す外枳形と解釈することが妥当であると考えられる。これについては、千田氏の解釈（文献9）が参考になる。
- （作成）佐賀藩御境目方模写、（成立）天保8年（1837）、（所蔵）鍋島報校会所有、佐賀県立図書館蔵
- （作成）佐賀藩、（成立）正保4年（1647）、（所蔵）鍋島報校会所有、佐賀県立図書館蔵
- 『別本吉川家譜』「廣正公ヨリ御本家へ差出サル、御書物」（文献3収録）によると、吉川氏は毛利輝元から岩国城の破却を命じられた際、「毛利領は防長ニカ国なので二城を残してもよいはずである。防州には岩国城しかないので残しても構わないはずである。それに先年より自分が岩国城に居城していることは家康公も御存知のことだから幕府へ一旦、伺いを立てて頂けないか」と返答している。しかし、輝元は「長府之城同前ニト被思召、御内意共候哉、彌破却可仕之由、重疊御意付而、不能違背、城ワリ申候トアリ」と、強い態度で岩国城の破却を重ねて要求している。ここには岩国城の「城割」に対する輝元の積極的な姿勢が窺われる。
- 寛永7年の『寺澤侯寛永高帳 全』（松尾家所蔵、唐津市立近代図書館にコピー製本有り）をみると、肥前名護屋城が位置する名護屋村は寺澤氏の蔵入（直轄）地となっている。また、名護屋城の規模・土木量が本城唐津城を凌ぐものであったことを考えても大身家臣の持ち城ではなく寺澤氏の直轄であった可能性が高い。

文献

- 1) 八巻孝夫：「中世城館研究への提言」（『地方史研究 202』、地方史研究協議会、名著出版、1986.8）
- 2) 千田嘉博：「中世城郭から近世城郭へー山城の縄張り研究からー」（『月刊文化財 305』、第一法規出版、1989.2）
- 3) 『大日本史料 12-21』、東京大学史料編纂所編、東京大学出版会、1973.10
- 4) 『筑前鷹取城跡（IV）』、直方市教育委員会、1990.3
- 5) 『東北横断自動車道遺跡調査報告 1 5 木村館』、福島県教育委員会・福島県文化センター・日本道路公団、1992.12
- 6) 宮田逸民：「利神城の城割について」（『播磨利神城』、城郭談話会、1993.8）
- 7) 『根城一本丸の発掘調査』、八戸市教育委員会、1993.3
- 8) 「城を破るー降参の方法②」（『歴史を読みなおす15 城と合戦』、朝日新聞社、1993.10）
- 9) 千田嘉博：「織豊系城郭の構造ー虎口プランによる縄張り編年の試み」（『史林70-2』、京都大学文学部史学研究会、1987.3）
- 10) 吉村茂三郎編：『松浦叢書第2巻』、松浦史談会、1938.1
- 11) 吉村茂三郎編：『松浦叢書第1巻』、松浦史談会、1934.4
- 12) 『名護屋城秘史』、名古屋宇太郎・名古屋経一著、名護屋城趾研究会、1930.7
- 13) 加藤隆『幕藩体制と城郭』、近世日本城郭研究所、1983.2
- 14) 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集『宇土城跡（西岡台）』、宇土市教育委員会、1977.
- 15) 『岩国城と錦帯橋史料』、岩国徴古館、1966.3
- 16) 出水叢書『綿考輯録』第六巻〔細川忠利公（下）〕、出水神社、汲古書院、1990.11
- 17) 拙稿「近世初頭九州における支城の縄張り構造ー佐敷城（肥後加藤領）における大名権力との相関ー」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』（東海）、1994.3）
- 18) 山口県埋蔵文化財調査報告第173集『岩国城跡（天守）』、山口県埋蔵文化財センター、岩国市・岩国市教育委員会、1995.3
- 19) 『特別史跡名護屋城跡並び陣跡3 文禄・慶長の役城跡図集』、佐賀県教育委員会、1985.
- 20) 『松浦記集附録一』、（著）河東義剛、（成立）文化4年（1807）、（写本）長崎県立図書館

（1995年5月8日原稿受理，1995年10月11日採用決定）